



第 21 号
平成 28 年 3 月 7 日
発行
熊本市北区
高平 2-20-35
浄国寺
編集者
曹宗 中山 義紹

平成二十八年 春季彼岸会法要

春彼岸法要の開催

三寒四温とは言いますが、今年は特別に気温の変動の幅が大きいです。体調を崩される方も多いため、心配しております。

今年も例年通り、三月二十四日（今年、木曜日）に開催いたします。今年、法話をいただくお寺の方丈様は、天草市のお寺の住職で比較的若い方ですが、在家出身と言ふ事も有り分かり易い話を頂けると期待して

います。浄国寺では、お彼岸に一軒一軒にお邪魔して、佛壇の前で彼岸の先祖供養の回向を務める習慣は



ありません。しかし、本来にはお彼岸には節目として春と秋の二回、先祖と自然の恵みに感謝して供養を行うという習慣があります。秋の彼岸は、併設の幼稚園の運動会とも重なり、法要の開催ができませんが、春の彼岸だけは、近隣の方丈様方

浄国寺春季彼岸会

日時 平成二十八年三月二十四日 (木)

午前十一時より

春季彼岸壇信徒総供養

供養 了つて

法話 天草市本町

迦葉寺 住職 葛西啓二 老師

簡単な弁当を用意しております。出欠及び人数を同封の葉書で返信下さい

お彼岸の由来

に來て頂き檀信徒総供養という形で務めます。年に二回の寺での法要ですが、足をお運び頂き、お寺と仏様の教えに触れて頂ければ幸いに存じます。是非、お詣り頂きますよう御案内申し上げます。

仏教經典の中にはお彼岸について直接的に書かれたものはありません。彼岸に先祖への供養を行うのは、日本に昔からある「先祖は家の守り神である」という考え方や、日本が長く農耕社会であり、自然への畏敬の念を（天候の安定を祈り、収穫に感謝する）を示す習

慣と結びつきながら定着したものと思われ。ただ、『彼岸』という言葉が、足をお運び頂き、お寺と仏様の教えに触れて頂ければ幸いに存じます。是非、お詣り頂きますよう御案内申し上げます。私には、この向こう岸こそが「涅槃（ねはん）」の悟りの世界、こちら側（此岸）と考えています。これに對して我々の居る世界は「娑婆（しゃば）」といいますが、娑婆とは古代インド語の音訳で通常「忍土」と訳されます。即ち「苦しみ」に耐え忍ぶ世界という意味です。近頃は、あまりヤクザ映画やドラマも放映されませんが、以前は刑務所から刑期を

教の祖であるお釈迦様の出発点です。しかし、お釈迦様は「苦」からの解放を説かれました。それが仏教の始まりです。最初の教えの中に「縁起の法則」というのがあります。今、我々が生きて居るのは、決して単なる偶然ではなく、様々な原因（因）に新たな原因や条件（縁）が加わった結果（果）として、ここに呼吸しながら生きているのです。この新たな因や条件（縁）をお陰と説言います。我々はお陰様で、この世界に生きているのです。これは、そう有る事が大変難しいことなのです（だから有難いのです）。更に言え

終えたヤクザが「シャバの空気がうめえなあ」と一服するシーンがあり、「娑婆」は良いところと勘違いする人も居たようですが、我々の居る世界は「苦に満ちた世界である」というのが仏

ば、我々がここに存在する最も大きな因は、親の存在です。親もその両親がいなければ、我々は存在しなかつた訳です。つまり、先祖がいたからこそ、ここに今生きています。その先祖に有り難うと感謝を伝え、現状を報告する作業、これが先祖供養です。お彼岸は、供養の一つの機会です。たとえ、法要に参加できなくても、彼岸に渡られたご先祖に家族の様子をご報告頂きますよう御願ひ致します。

永代供養という言葉

数年前に納骨壇を増設しました。世間で流行りの「終活」の影響もあるのか、納骨堂に加入したい方も増えてきました。この時に「納骨堂の永代供養をお願いします」と言って申し込まれる方がおられます。納骨堂に加入するのは加入(使用)契約を結ぶ事で、「供養は加入者がするものですよ」とお話ししています。家庭によつては、子どもが居ないので自分の代以降は誰も供養してくれる者がいないので不安だという方、その他の事情で、後が

心配だという方もいます。こう言う場合は、不安を抱えたまま生活するのも問題ですし、別途に永代供養の契約を結びます。しかし、原則として親の供養は子が行うのが前提だと思います。たとえ核家族化が進んだとしても、親子の「縁」は縁です。子どもに迷惑を掛けたくないからと言われる方もいらっしゃるかもしれませんが、親の供養という作業は迷惑なのでしょうか？ 私は面倒であっても務めるべきは務めるのが筋だと思えます。場所によつては納骨堂加入と永代供養を一つにして募集されるお寺もあります。当寺は、加入と供養は分けて考えています。



緋恩衣被着の許可

昨年、晋社式を修行して本庁より緋色の衣を着る許可を頂戴しました。現在、熊本県第一宗務所の副所長という職についています。過去にも青年会活動に励んできました。これらを功績

として、永平持護持団体の推薦をうけ、恩衣(襟と袖に十二単の縁取りがしてある衣)を着る許可を戴きました(緋色の恩衣で緋恩衣です)。自分が、そのような衣を着るに値するか疑問です。何より恥ずかしいのですが、折角、推薦と許可を戴きましたのでお知らせいたします。

今年こころにZEN

毎年、開催している企画も少しずつ定着してきました。近年、音楽会等の色々な企画をお寺で開催する所も増えてきたようです。「お寺は生きている人々が、より良く生きる術を学ぶ場所」これは高校生の頃から、私が言い続けてきた事です。世相の不安か、伝統回帰なのかは分かりませんが、坐禅を始めお寺や仏教に興味を持つ人が増えているように思います。お寺に一歩足を踏み入れる、本堂の中

の空気に触れる、そこでの何かを感じて頂ければ幸いです。この数年、私が考える仏教の視座について話してきました。今年も、他の宗教や他の仏教教派の方との対談を久しぶりに行いたいと思つています。日本のジャズベース界の最重鎮、鈴木良雄氏も来て頂けます。近年評判の良かった円熟のグループ「ベース・トーク」(毎年それぞれのグループが素晴らしい演奏をしますが)を率いてのプレイを予定しています。近頃は、居酒屋からラーメン屋までBGMにジャズが流れるようになりました。

それだけ身近になつたジャズの生演奏を、是非お楽しみ下さい。



定例木曜坐禅会

毎週木曜日 午後八時より

当山本堂にて

一炷(約四十分)坐禅をして、仏教や禅の著述に関する話(約二十分)。今は正法眼蔵坐禅儀。会費、会則一切なし、初めての方は連絡下さい。

平成二十八年 浄国寺予定
四月二十九日(金) 午後二時
松本喜三郎 墓前祭
喜三郎翁 追悼供養
谷汲観音供養 その他
施餓鬼会法要
お公徳信徒先祖総供養
十月二十一日(土) 午後六時
「いま 心」
仏教講演会 鈴木良雄 & 記念音楽会 Bass Talk

身辺雑記

今年度から幼稚園・保育所の制度が変わった。女性による労働力の確保とそれに伴う待機児童の解消が主な目的である。そこには大切な乳幼児期の成長と発達という部分が抜け落ちていく。同時に大人としての成長も忘れられている。大人になりきれない親を「親」という一人の大人に育て上げるのは「子」の存在だ。小さい子は理屈抜きに親を鍛えてくれる。誰でも辛い事、きつい事は嫌で、避けたいと考える。親であっても同様だ。しかし、それを経験して初めて身につく事が沢山あるのも頑然とした事実である。爺婆は孫に甘いので何でも引き受ける。施設も一所懸命に子どもに接している。政治家は票目的で良い顔がでける制度を作る。斯くして、子が育つ環境は変わり、子育てのコンビニ化が進む。かわいそうなのは、当のことも違である。